

要旨

Chomsky (2015): POP+では、unvalued 素性がフェイズを構成し、CPとv*Pがフェイズであると想定している。Sakumoto (2020) では、CPに焦点を当て、unvalued 素性がフェイズにとって必要であるという主張に基づき、Cがフェイズを構成するためには、unvalued ϕ 素性が必要であると論じており、その存在の違いから、非定形節と定形節からの抜き取りに関する文法性の違いを説明している。しかし、 ϕ 素性を持たない日本語がフェイズを持ち得るのかという問題が生じる。日本語のCPに着目すると、英語の非定形節同様、フェイズ性が見られない。Saito (2017a) はQuicoli (2008) の提案を採用し、照応形の分布に基づき、日本語のCがその補部を転送していないと主張している。更に、Saito (2017b) は、日本語のvPと英語のvPがフェイズを構成するデータを示している。よって、本発表はCPではunvalued ϕ 素性、v(*)Pでは verbal Categorizerがフェイズを構成すると提案する。これにより、全ての言語において、vは普遍的にフェイズを構成することになり、日本語はCPがフェイズを構成せず、vPがフェイズを構成することになる。

1. 理論的背景

1.1 フェイズ理論

Chomsky は、Chomsky (2000) 以来、CP と v*P が派生の単位となるフェイズであり、派生は(1)のPICによって制限されていると論じてきたが、Chomsky (2015) において、(2)のように unvalued 素性がフェイズを構成するという提案をおこなっている。

(1) Phase Impenetrability Condition (PIC)

In phase α with Head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky (2000: 108))

(2) ...the fact that languages have unvalued features, assigned values in certain structural positions.

These features mark phases, a particular execution of strict cyclicity, well-motivated on grounds of computational efficiency; (Chomsky (2015: 5, underline is mine))

1.2 非定形節のフェイズ性

近年、非定形節がフェイズを構成しないことは、多くの研究で実証されている (Grano and Lasnik (2018), Kanno (2008), Sakumoto (2020), Wurmbrand (2013)). Sakumoto (2020) は CP に焦点を当て、unvalued 素性がフェイズにとって必要であるという Chomsky (2015) の示唆に基づき、Cがフェイズを構成するためには、unvalued ϕ 素性が必要であると主張している。その存在の違いから、以下の文法性の違いを説明している。(3)はヨーロッパポルトガル語の *Wh* 島、(4)は *Wh* 島、(5)は付加詞の島 (Ross (1967)) の例である。

(3) a. O que (.que) perguntaste como/quando arranjar?

what wondered-you how/when to-fix

‘What did you wonder/ask how/when to fix?’

(Sakumoto (2020))

*九州大学大学院修士課程 ysakumon@gmail.com

b. *O que (.que) perguntaste como/quando arranjaras?
 what wondered-you how/when to-fix.2sg
 ‘What did you wonder/ask how/when to fix’ (Sakumoto (2020))

(4) a. What_i do you wonder [how_j to repair *t_i t_j*]? (Manzini (1992: 51))
 b. *What_i do you wonder [how_j Mary repaired *t_i t_j*]? (*ibid.*)

(5) a. *Who did John go home [after he talked to *t*]? (Truswell (2011: 176))
 b. Who did John get upset [after talking to *t*]? (*ibid.*: 129))

Sakumoto (2020) は、付加詞の島をフェイズの概念に基づく PIC で説明可能であることを論じている。まず、付加詞は Chomsky (2004) の想定とは異なり、その内部も可視的であり、付加詞の CP 指定部には Haegeman (2012) に従い Temporal Operator があるため、*Wh* 島と同様に PIC によって説明できる。従って、(5) の文法性の違いは付加詞の C が ϕ 素性を持っているかどうかによって左右される。(5b) の付加詞の C は (5a) とは異なり、unvalued ϕ 素性がないため、フェイズを構成せず、*Wh* 抜き取りが可能であると Sakumoto (2020) は主張している。

2. 問題提起

2.1 日本語の問題

Sakumoto (2020) による unvalued ϕ 素性がフェイズを構成するという主張をみてきたが、 ϕ 素性を持たない日本語 (Miyagawa (2010), Saito (2017a)) がフェイズを持ち得るのかという問題が生じる。日本語の CP に着目すると、英語の非定形節同様、フェイズ性が見られない。日本語における付加詞の島からの *Wh* 抜き取りの例 (6) が文法的であることから、英語同様、付加詞の CP が unvalued ϕ 素性をもっていないため、フェイズを構成していない可能性がある。

(6) Taroo-ga doko-ni itta kara umaku itta no?
 Taroo NOM where DAT went because well went Q
 ‘Where did things go well [because Taroo went *t*]?’ (Richards (2000: 187))

Saito (2017a) は、Quicoli (2008) の提案を採用し、照応形は C-I interface に転送される際に、その指示/先行詞情報が確定されていなければならないと想定している。(7) は、*John=himself* の情報を C-I interface に転送することができるため文法的であり、(8) では *John* が派生に導入される前に、照応形 *himself* は既に転送されているため、*John=himself* の情報を C-I interface に転送することができず、非文法的であると説明される。同様に、(9a) は非文法となるが、Yang (1983) によって最初に観察された (9a) に対応する日本語の文 (9b) では、埋め込み CP の中に *zibunzishin* があるのにも関わらず、主節の主語 *Taroo* を先行詞にとることができるので問題となると Saito (2017a) は指摘している。

(7) a. John recommended himself
 b. [_{VP} John [_v [_{VP} recommend himself]]] (Saito (2017a: 4))

(8) a. *John thinks that Mary recommended himself
 b. [_{VP} Mary [_v [_{VP} recommend himself]]] (*ibid.*)

(9) a. *John thinks [_{CP} that [_{TP} himself will be nominated]]

(Saito (2017a: 7))

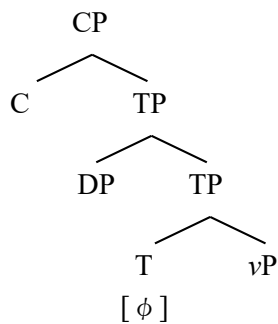
b. Taroo-wa [_{CP} [_{TP} zibunzishin-ga suisensareru] to] omotteiru
 Taroo-Top self-Nom nominated-will.be C think
 ‘Taroo thinks that he (= Taroo) will be nominated.’

(*ibid.*)

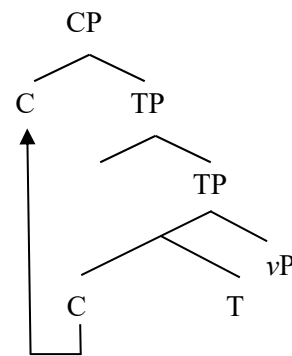
そこで、Saito (2017a) は、(10) を提案した。これは、T が ϕ 素性を持つ場合は、(11a) のように TP が転送されるが、T が ϕ 素性を欠く場合、(11b) のように C と T が併合して C が編出 (excorporate) するのである。後者の場合、(12) (13) の定義に基づき、TP は転送されない。

(10) When the CP phase is completed, the complement TP is transferred if T carries ϕ -features, but only ν P is if T does not agree with the subject. (Saito (2017a: 8))

(11) a.



b.



(Saito (2017a: 9))

(12) ...the transfer domain can be the maximal phrase that excludes the phase head. (*ibid.*)

(13) α excludes $\beta =_{\text{def}}$ α does not dominate any instance of β . (*ibid.*)

(14)では、埋め込み C の補部である TP が転送されているため、*himself=John* の情報を送ることができないが、(9b) は転送領域が ν P であるため、TP 指定部の照応形情報を得てから転送されるため文法的となる。

(14) *John thinks [_{CP} that [_{TP} himself will be nominated]]

(Saito (2017a: 7))

よって、CPに関しては、unvalued ϕ 素性がフェイズを構成していると考えerことは妥当である¹。

2.2. ν (*)P フェイズ

ν (*)P に関しても unvalued ϕ 素性がフェイズを構成するのであれば、日本語にはフェイズが全く存在しないことになってしまう。Saito (2017b) は、日本語と英語の非対格、受動 ν P がフェイズを構成していると論じている。(15) では、照応形の *zibunzisin* が主節の主語の先行詞をとることがで

¹ Saito (2017a) は、 ϕ 素性によって転送領域が決定される主張しているが、CP はフェイズであると想定している。本稿は Saito (2017a) の主張とは異なり、(11-13) を仮定せず、Sakumoto (2020) に従い unvalued ϕ 素性を C が持たない場合、その C はフェイズを構成しないと想定する。

きないため、非対格動詞 *tumazuita* がフェイズを構成しており、同様に (16) の英語の例も受動 *vP be introduced* がフェイズを構成していると Saito (2017b) は主張している。

- (15) Taroo-ga [CP [TP Hanako-ga zibunzisin-no kaban-ni tumazuita] to] itta (koto)
 Taroo-NOM Hanako-NOM self-self-GEN bag-over stumbled COMP said fact
 ‘Taroo said that Hanako stumbled over her own/*his own bag.’ (Saito (2017b: 67))

- (16) a. *John expects [the guests to be introduced to himself] (ibid.)
 b. *Mary believes [the speakers to have been introduced to herself] (ibid.)

同様に、Legate (2003) も英語の非対格と受動 *vP* がフェイズを構成している証拠を提示している。(17a) では、*he* が *every man* によって束縛されることによって適切に解釈される可能な再構築場所は t_k が存在するため文法的であるが、(17b) では、 t_k 位置は、*he* は *every man* によって束縛されるが、R 表現である *Mary* が *she* によって C 統御されるため、束縛原理 C の違反となり、利用不可能となる。そのため、適切に解釈される可能な再構築場所が存在しないため、非文法的となる。移動はフェイズエッジを経由するという仮定に基づき、この再構築のデータは受動 *vP* がフェイズである証拠となると Legate (2003) は主張している。しかし、日本語、英語共に非対格 *vP* と受動 *vP* は ϕ 素性を持っていないため、*vP* レベルでは、unvalued ϕ 素性がフェイズを構成しているとは考えることは難しいため問題となる。よって、*v*(**P*) において、何がフェイズを定義づけているのかを追求する必要がある。

- (17) a. [At which of the parties that he_i invited $Mary_j$ to] $_k$ was every $man_i t_k$ introduced to $her_j t_k$?
 (Legate (2003: 2))
 b. *[At which of the parties that he_i invited $Mary_j$ to] $_k$ was $she_j t_k$ introduced to every $man_i t_k$?
 (ibid.)

3. 提案

3.1 フェイズの決定要因

本稿では、前章での問題を解決するために、(18) を提案する。

- (18) CP では unvalued ϕ 素性、*v*(**P*) では verbal Categorizer がフェイズを構成する。

Chomsky (2015: 15) では、R が root-categorization のために *v** に普遍的に移動すると想定している。root-categorization のためであるならば、この移動は *v** だけでなく、全ての *v* に当てはまるはずである。よって、全ての言語において、*v* は普遍的にフェイズを構成することになり、上記の全てのデータが説明可能である。これにより、日本語は CP がフェイズを構成せず、 ϕ の有無に関係なく *vP* がフェイズを構成することになり、英語の *vP* もフェイズを構成することになる。次節では、この提案から生じる問題とその解決案を示す。

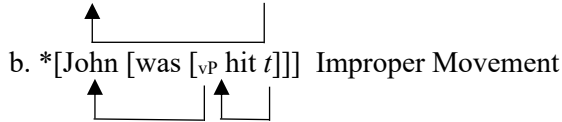
3.2 Improper Movement

Otsuka (2014) は、*vP* がフェイズを構成すると、Improper Movement の問題 (19) が生じると指摘している。(20a) のように PIC により、一度に移動できないとすると (20b) のように *vP* 指定部を経由する移動しかないはずであるが、これは (19) により許されない。

(19) Improper Movement

\bar{A} -movement of a constituent X cannot be followed by movement of X to an A-position. (Safir (2019: 288))

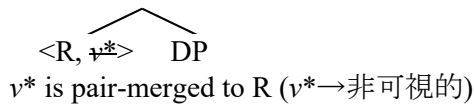
(20) a. *[John [was [_{vP} hit t]]] PIC violation



(Otsuka (2014: 511))

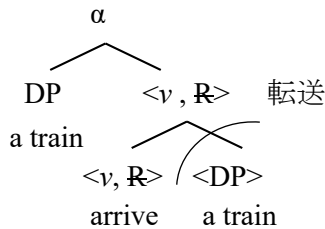
Chomsky (2015) は、非対格と受動 vP の派生について言及していない。Epstein, Kitahara and Seely (EKS (2016)) は、非対格の派生として External pair merge of v^* to R を提案している。

(21) External pair-merge of v^* to R (EKS (2016))



しかし、この分析は v^* が非可視的となり、フェイズ性がなくなるため採用できない。本研究は、Otsuka (2017) によって提案された external Pair-Merge of R to v^* を採用する。

(22) External pair-merge of R to v^2



この分析は、Improper Movement の問題を解決することができる。Mizuguchi (2019) は $\langle C, T \rangle$ は A 位置であると主張している。Obata and Epstein (2011), van Urak (2015) による ϕ 素性が A 位置を決める上で、重要な役割を果たすという提案を応用して (23) を提案している。

(23) The NP is in an A-position if it is merged with an SO headed by a head bearing ϕ -feature; otherwise it is in an \bar{A} -position. (Mizuguchi (2019: 391))

よって、Mizuguchi (2019) は、 $\langle C, T \rangle$ は A 位置となると論じている。これを応用して、本発表は (24) を提案する。

(24) CP では ϕ 素性が A 位置を決めるが、 vP では、A 位置を verbal Categorizer が決める。

CP では、unvalued ϕ 素性がフェイズを決定するが、 vP では verbal Categorizer がフェイズを決定するため、A 位置も vP では ϕ 素性ではなく、verbal Categorizer が A 位置を決めると考えることができる。よって、 $\langle v, R \rangle$ は A 位置であるため、Improper Movement が生じない。

² 本稿の提案では、 v^* と v の違いは ϕ 素性の有無だけとなる。また、Otsuka (2017)とは異なり、転送されるものは Rではなく、DPであると想定する。

3.3 フェイズの役割

Chomsky (2015) においては、自由併合が採用されているため、フェイズが統語操作を駆動するものとする必要がない。日本語の CP にフェイズが存在しないとしても、unvalued Focus 素性と unvalued Top 素性を持つことが可能である (cf. Miyagawa (2010))。これは、(25a)、(26a) のコントロール CP にはフェイズがないのにも関わらず、unvalued Q 素性を持っていることから支持される。

- (25) a. O que (.que) perguntaste como/quando arranjar?
what wondered-you how/when to-fix
'What did you wonder/ask how/when to fix?' (= (3a))
b. *O que (.que) perguntaste como/quando arranjares?
what wondered-you how/when to-fix.2sg
'What did you wonder/ask how/when to fix' (= (3b))
- (26) a. ?What_i do you wonder [how_j to repair $t_i t_j$]? (= (4a))
b. *What_i do you wonder [how_j Mary repaired $t_i t_j$]? (= (4b))

4. まとめ

日本語と英語におけるフェイズの決定要因を追求し、CP と vP におけるフェイズの決定要因の差異を指摘した。そこで、CP では unvalued ϕ 素性、v(*)P では verbal Categorizer がフェイズを構成すると主張し、先行研究における問題の解決を試みた。また、フェイズが統語操作を駆動するものとする必要がないことを論じた。

参考文献

- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures 3*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Epstein, Samuel, Kitahara Hisatsugu and Daniel Seely (2016) "Phase-Cancellation by Pair-Merge of Heads," *The Linguistic Review* 33, 87-102.
- Grano, Thomas and Howard Lasnik (2018) "How to Neutralize a Finite Clause Boundary: Phase Theory and the Grammar of Bound Pronouns," *Linguistic Inquiry* 49: 465-499.
- Haegeman, Liliane (2012) *Adverbial clauses, main clause phenomena and the composition of the left periphery*, Oxford University Press, Oxford.
- Kanno, Satoru (2008) "On the Phasehood and Non-phasehood of CP," *English Linguistics* 25: 21-55.
- Legate, Julie A. (2003) "Some Interface Properties of the Phase," *Linguistic Inquiry* 34, 506-516.
- Manzini, Maria, Rita (1992) *Locality: A theory and some of its empirical consequences*, MIT Press, Cambridge
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-based and Discourse Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Mizuguchi Manabu (2019) "Optional Raising in ECM and Labeling of XP-YP" *Studies in Generative Grammar*, 29:373-411.

- Obata, Miki and Samuel David Epstein (2011) "Feature-splitting internal merge: Improper movement, intervention, and the A/A' distinction," *Syntax* 14:122–147.
- Quicoli, A. Carlos (2008) "Anaphora by Phase," *Syntax* 11, 299-329.
- Otsuka, Tomonori (2014) "AN EXTENSION OF FEATURE-INHERITANCE," *English Linguistics* 31: 509-544
- Otsuka, Tomonori (2017) "On Two Ways of External Pair-Merge," *Proceedings of GLOW in Asia XI*, volume 2, 135-146.
- Safir, Ken (2019) "The A/A'-distinction as an epiphenomenon," *Linguistic Inquiry* 50, 285-336
- Saito, Mamoru (2017a) "Notes on the Locality of Anaphor Binding and A-Movement." *English Linguistics* 34, 1-33.
- Saito, Mamoru (2017b) "A note on transfer domain." *Nanzan Linguistics* 12: 61–69.
- Sakumoto, Yuya (2020) "What defines phases?" *The English Linguistic Society of Japan 13th International Spring Forum*
- Quicoli, A. Carlos (2008) "Anaphora by Phase," *Syntax* 11, 299–329.
- Richards, Norvin (2000) "An Island Effect in Japanese", *Journal of East Asian Linguistics* 9, 187-205.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Truswell, Robert (2011) *Events, phrases and questions*, Oxford University Press, Oxford.
- Van Urk, Coppe (2015) *A uniform syntax for phrasal movement: A case study of Dinka Bor*, Doctoral dissertation, MIT.
- Wurmbrand, Susi (2013) "QR and selection: Covert evidence for phasehood," *NELS* 42, ed. Stefan Keine and Shayne Sloggett, 277-290.
- Yang, Dong-Whee (1983) "The Extended Binding Theory of Anaphors," *Language Research* 19.2, 169-192.